誘拐報道

読売新聞大阪社会部

新潮社

誘拐報道

読売新聞大阪社会部

新潮社

誘拐報道

発　行　昭和56年4月20日
11　刷　昭和57年10月15日
著　者　読売新聞大阪社会部
定　価　980円
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町71
電話　業務部（03）266-5111
　　編集部（03）266-5411
振替 東京 4-808
印刷所　株式会社金羊社
製本所　加藤製本株式会社
© Yomiuri Shimbun-sha, Printed in Japan 1981
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

誘拐報道・目次

1 発端 7
2 記者会見 16
3 報道協定 25
4 厚い壁の前で 36
5 深夜の記者 49
6 止まった動き 64
7 前線デスクの苦悩 72
8 看護婦の推理 82
9 動き出した犯人 94
10 前進基地 103
11 不安 116

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

12 父親の抵抗 126
13 不吉な予感 136
14 抗議 143
15 小休止 151
16 逮捕 157
17 全面展開 175
18 混乱 190
19 意外な事実 202
20 祝盃 211
21 除名 228
あとがき 241

誘拐報道

1 発　端

読売新聞神戸支局長の若狭晃は、四十六年型ブルーバードの運転席で、身をそり返らせるようにしてアクセルを踏んだ。身長一五六センチ、柔道で鍛えた体は浅黒くがっしりとしていて、どんなハード・スケジュールにも音を上げないが、足が短いからアクセルを踏むときは、いつもそんな恰好になる。口の悪いのは、支局長が運転している車を外から見ると、無人カーが走っているように見えますなあなどと言う。そんなとき、若狭は決して怒らない。まるい眼鏡をかけた童顔をニコニコさせて、なにぬかしやがる、もう今日は呑ませてやれへんど、と軽口を叩くぐらいである。彼が怒るのは記事を抜かれたときだけだ。

彼の心は、はずんでいた。四六時中、支局を中心に神戸市内を行動する日常の生活から、今日一日だけは離れられるのだ。といっても休日というわけではない。神戸から百三十キロほど離れた氷上郡柏原町の医療功労賞の表彰式に出席したり、そこから足を伸ばして多紀郡篠山町の販売店に顔を出したりという仕事をからめての遠出だが、それでも根っからの新聞記者である若狭にとって、それは日常の垢を落とす絶好の休日と言えた。

ふつう支局長が外出する場合、支局に常駐している二台の車のうちの一台を使うことになって

いるのだが、今日は運転手付きの車に乗る気にはなれなかった。柏原まで行く途中には彼の実家があり、そこには七十を過ぎた母が野良仕事をしながら暮らしていた。彼はこのところめっきり体の弱って来ている母親を、この機会に元気づけてやろうと思っていた。

一月の二十三日、快晴で、空は明るかった。赤い車体のスポーツタイプ・ブルーバードは、あるじの心が伝わったかのように、スチールラジアルタイヤの上で、はずむように走った。新神戸トンネルを抜け、三田(さんだ)市を過ぎると、丹波路特有のひなびた朝の匂いがした。連日の酒やイライラした神経の沈澱物が、そんな澄んだ空気によって、どんどん体から抜けて行くのがわかった。

新聞社の支局長というのは、外見はともかく、なかなか気の疲れる仕事なのだ。県内で起こるいろいろな事柄についてはすべて社を代表して対処しなければならない。財界や知名人との会合も欠かせないし、支局内の事務的な雑用もこなさなければならない。販売店からの苦情や注文もさばくし、もちろん本筋の仕事として、毎日の紙面から目も離せない。支局員が仕事をやりやすいように神経をくばっていなければならないし、酒をつき合ってやることも少なくない。

夕刊紙の記者時代から二十数年間、事件一本でやってきた若狭にとって、そういう行政的な事柄をこなすのは得意であるわけはないのだが、ちょっと類のないくらい楽天的なファイターである彼は、支局長に任命されるや、よっしゃ、やったるでえと大阪の家庭に妻子を置いたまま、神戸市内にアパートを借り、全力投球で仕事にぶち当たっていた。しかしこの一年余りの間、支局員の伝票にハンコを押したり、地方部長に渡す経理報告書に目を通したりしながら、でっかい事件でも起こらんかなあ、という気持にいつもとらわれていた。平和な日々を過ごしながら、心の底には気のつかない間にそんなイライラがたまってしまっているのだった。

一時間半ほどのドライブのあと、国道そばにある実家に着いたとき、イライラはすっかり姿を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

消していた。支局を出る前に電話してあったので、野良着姿の母親は、同じ県内にいながら滅多に帰郷しない息子を喜んで迎えた。

母親は弟夫婦と一緒に住んでいた。本来なら長男の若狭が家督を継いでいなければならないのだが「どうしても新聞記者になりたい」というわがままを、父も母も快く許してくれたのだ。父は八年前、自宅近くの国道を通って田んぼへ行く途中、居眠り運転のライトバンにはねられて死んだ。あの日は大阪で千日デパートビルの火災事故があった。百十八人が死ぬという惨事で、社会部員だった若狭は、徹夜で現場にいたとき、父の死を知らされた。あの時もこの車でかけつけたが、実家への道があんなに遠いと思ったことはなかった……。

小柄な母親は、車の音を聞きつけると、待ち切れないように足をひきずって、表へ迎えに出て来た。ここ数年リューマチがひどいのだ。それに二年前、胃潰瘍の手術をしてから、よけい体が小さくなっていた。

「遅かったに。もっと早く来んけ」

汚れたモンペとエプロンの母親は、しわだらけの顔を親不孝な息子に向け、やさしさをその顔一ぱいにあらわして言った。若狭は小さな肩を抱くようにして、

「ごめんよ、仕事が忙しいんや」

と答えながら、家の中へ入った。

「そんなに忙しんけ。お昼食べて行きよ」

母親は足をひきずりながら野菜やイカのてんぷらを食卓に並べ、白いホカホカのごはんを山盛りについだ。

「ああ、そうや。お前は漬けものが好きやったなあ」

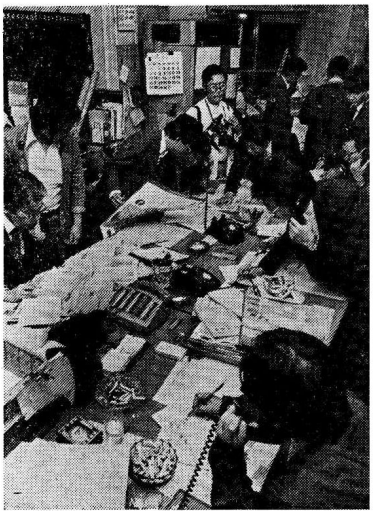
母親は納屋へ行ってヌカミソがついたままの大根をぶら下げて戻って来た。
丹波米の味の良さは、大阪や神戸の食堂で食べる米とはくらべものにならない。漬けものさえあれば何杯でも胃の中へ入る。
母親は、うれしそうな顔をして、白いメシをかき込む息子を見つめていた。
「ああ、おいしかった。さて、もうそろそろ行かなくては……」
若狭はわざとわきの方を見ながら軽く言ってのけた。母親の顔を真正面から見ると涙が出そうで、発ちにくくなるのがわかっていた。
「もう行くんけ……」
案の定、母親は泣きそうな顔をした。若狭はとっさに決心した。
「柏原と篠山へ行って、できたら帰りに寄る。少しおそくなるかも知れんけど、泊めてもらうよ」
しわだらけの顔が、日の当たったように明るくなった。
「ほんまけ！　待っとるよ」
若狭は出まかせを言ったのではなかった。たまには親孝行をして、あすは早朝、実家から出勤しよう……。

柏原町にはちょうど表彰式のはじまる午後二時の五分前に着いた。医療功労賞は、辺地など恵まれない環境のなかで地域住民の健康を守っている医師や看護婦を称えるもので、県で毎年一回、一人を選んで表彰する本社事業だった。今年は氷上郡氷上町の吉田稔夫医師が選ばれ、表彰式が柏原町保健所で行われることになったのだ。

なれないあいさつをしたあと吉田医師を囲んで懇談、若狭が柏原から三十キロ離れた篠山町の販売店に寄り、所用をすませて友人の中西通を訪ねたのは午後八時四十五分であった。篠山は若狭の故郷に近く、販売店主の山本博大も中西も、篠山鳳鳴高校時代の後輩であった。中西は丹波焼を中心とした焼きものを保存する丹波古陶館と、江戸時代に篠山城下に伝わった春日能の資料を集めた能楽資料館を設立して、郷土の文化を守っている。がさつな若狭とはかなり肌合いが違うのだが、不思議にウマが合い、若狭は篠山に来れば必ずこの後輩に会って話をするのを楽しみにしていた。

「やあ、よう来てたった。軽うやろうけ」

なつかしい郷土なまりで能楽資料館主が先輩をさそったとき、資料館受付の電話が鳴った。



事件発生に緊迫する神戸支局

若狭は、実家から母親が「早く来い」という催促をして来たのかと思ったが、電話は昼間一緒だった柏原通信部の高階勝郎記者からだった。

「支局長、誘拐事件が発生したそうです」

高階の声を聞いたとたん、若狭はしまったと思った。一瞬のうちに頭の中からすべてのことが消えた。これから後輩と軽くやるはずだったことも、やさしい母親のことも、見事にどこかへ行ってしまった。それは事件記者を二十年以上もつづけて来た男の習性のよう

なものであった。
若狭はすぐ電話を切り、神戸支局のダイヤルをまわした。夕方、柏原を発つときにも電話を入れたのだが、そのとき次席の河野英雄は、
「変ったことはなにもありません。ゆっくりして来て下さい」
と、のんびりした口調で言っていた。今、受話器のむこう側から返ってくる河野の声は、先ほどとは同じ人間と思えないほど張りつめたものだった。
「支局長、誘拐です」
「そうらしいな。で、どんな……。被害者は女？　子供？」
「ええ、宝塚の歯科医師の長男で、小学校の一年生です」
「何時の発生や」
「学校の帰りに誘拐されたらしいんですが、県警から言って来たのは午後八時ごろで……」
「誘拐とすれば報道協定やな」
「ハイ、県警から協定を結んでほしいと言ってきました」
「そうか、それは受けな仕方ないわな。それで配置は？」
「ええ大丈夫です。支局員全員足どめして、きめ細かに取材配置をしております。きょうあすに解決するとは思われません。その覚悟で取材に取り組むように命じてあります。あまり飛ばさないように気をつけて帰って来て下さい」
河野の声はふだんより生き生きとしていた。この男も事件が好きである。だから支局長と次席という立場を越えて、気の合う仲間という感じで、二人の息はぴったり合っていた。
若狭は反射的に腕時計を見た。八時五十五分。事件のキャッチから一時間近く経っている。と

もかくすぐ帰ろう。彼は「すまん、あかんわ、事件やねん」と言うなり、きょとんとしている友人をあとにして車に乗り、朝にしたのと同じような姿勢で、身をそり返らせ強くアクセルを踏んだ。

だが、心の中は朝とはすっかり変わっていた。いまは一刻も早く支局に着きたい。百キロほどの距離だ。気はせくが事故でも起こしたら大変だ。落ちつけ落ちつけと自分に言い聞かせた。

いろいろなことが頭の中を走った。誘拐。行きずりの子供がかわいくて出来心から連れ去ったが……というようなのはともかく、身代金請求を伴った本格的な誘拐事件というのは滅多に起こらない。二十年余りの新聞記者生活のほとんどを、いわゆる事件記者として過ごして来た若狭にしても、まだその発生には出くわしたことがない。

もう二十年も前のことになるが昭和三十五年五月、雅樹ちゃん事件というのがあった。東京・銀座のカバン店「天地堂」総本店の尾関雅樹ちゃんという小学二年の子供が登校の途中に誘拐され、二日後に無惨な死体となって発見された事件だ。二カ月経った夏、その犯人が大阪・布施市(現在の東大阪市)で捕まった。そのとき若狭は大阪府警の一課担当記者だったから当然、逮捕現場に飛び走りまわったが、発生からたずさわるというのははじめてだ。それだけに、彼は身ぶるいする思いであった。と同時に、遅れをとったという感情が、くりかえし起こってくるのをとめることはできなかった。

支局長としての仕事で支局を離れていたのだから、だれからうしろ指を指されるわけでもないが、事件が起きたとき、できるだけ事件現場の近くにいるというのが、新聞記者にとって絶対に有利なことなのだ。支局から百キロ離れてしまっていてはどうしようもない。

とくに誘拐事件ということで、支局長として気になることがあった。それは警察との間に結ぶ

報道協定の問題であった。誘拐事件が発生した場合、警察ではまず被害者の生命を守り、そして犯人逮捕にこぎつけることが当面の大きな目的となる。そのために報道陣に対しては、事件解決まで一切の報道をさしひかえてほしいという報道協定を申し入れてくるのが通例になっている。その場合、警察記者クラブに申し入れがあり、各社が編集責任者に報告したうえ、文書をかわし協定が結ばれる。解決するまで記事を書かないのだから、一般の人は新聞やテレビ、ラジオを通じて事件について知らされることはない。事件が起きていることさえわからない。もちろん捜査に一般の人の協力を期待することはできなくなるが、犯人の側に捜査状況を知られるということもなくなる。

現に、雅樹ちゃん事件以来、新聞、テレビ、ラジオによって犯人が捜査状況を知り、追いつめられた気になって被害者を殺してしまうということが何回かあったのだ。だから報道の側として、それが報道統制につながらないかという不安があっても、警察の申し入れを拒否することはまずあり得ない。しかしその協定をよいことにして、警察が捜査の内容を必要以上に隠してしまうことにならないよう警戒もしなければならない。例えば、捜査段階で致命的なミスがあった場合、事件解決までは書かないという条件は守るにしても、そのミスについてもその都度発表されなければならないのではないか。また、報道側としても、いよいよ記事が解禁されたときには自由に競争できるという余地を残しておかなければならない。そうでなければ、報道側は自ら警察の統制に甘んじ、報道の自由を自ら捨てることになってしまう。

若狭は次席の河野英雄を百パーセント信頼していたが、やはりその協定文書に自分で目を通しておきたいと思い、いま、それができないことにかすかな不安を感じていた。警察は協定文のなかに、巧妙に報道管制に利用できるような字句を挿入してはいないだろうか。そして、まさかわ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com